

戦後の旧広島陸軍被服支廠における 転用の変遷及び周辺地域との関連に関する研究

酒井 恵¹・岡田昌彰²

¹正会員 株式会社ニュージェック (〒531-0074 大阪市北区本庄東 2-3-20)

E-mail: sakaimg@newjec.co.jp

²正会員 近畿大学教授 理工学部社会環境工学科 (〒577-8502 東大阪市小若江 3-4-1)

E-mail: okd@civileng.kindai.ac.jp

旧広島陸軍被服支廠は日本最古級の大規模な RC 建造物であり、軍都としての広島の発展を支えた。広島最大級の被爆建物としても知られ、戦時から被爆直後の歴史については各分野において注目されてきた。一方、当初の役割を終えた戦後、教育機関の学舎や寮、民間物流企業の倉庫として転用され、広島の戦後復興に貢献した。このような「戦後復興遺産」としての詳細や周辺地域との関わりについては十分な検証が行われていない。

本研究では、被服支廠が大学寮として転用されていた当時の元寮生ならびに地域の古老をはじめ関係者を対象としたヒアリング調査、及び教育機関の校史などをもとに情報収集し、特に広島大学学生寮「薫寮」としての利用実態に着目しながら戦後における被服支廠の転用実態の詳細を明らかにした。加えて、周辺地域に形成された商店街に着目し、被服支廠との関連について考察を加えた。

Key Words: Hiroshima Army Clothing Depot, Reuse, Postwar Reconstruction Heritage, Kunpu-Dormitory

1. 研究の背景と目的

戦前の軍都広島の発展に重要な役割を果たした旧広島陸軍被服支廠（以下、被服支廠）は最大級の被爆建物として知られ、戦後も教育施設や物流倉庫として再利用されるも現在は空き施設となっている。現存する4棟の倉庫は日本最古級の RC 造建築物であり、2023年4月現在、広島県の管理する3棟は今後保存・活用されることが決定している。2021年には活用の方向性に係る懇談会が県によって発足し、2023年3月、集う・交流、学ぶ・体験、創造・発信の3項目を柱とする案が提示された。

戦前及び被爆直後の被服支廠に関しては、倉田・水田らの研究¹⁾が存在するほか、地元の郷土資料館²⁾などによって当時の実態が明らかにされている。一方、当初の役割を終えた戦後、被服支廠は大学など教育機関の学舎や寮、民間物流企業の倉庫として転用され、広島の戦後復興に貢献した。このような「戦後復興遺産」としての位置づけや周辺地域との関わりについては十分な検証が行われておらず、それぞれの詳細な変遷も明らかにされていない状況にある。

本研究では、被服支廠が大学寮として転用されていた当時の元寮生ならびに地域の古老をはじめとする関係や



図-1 旧広島陸軍被服支廠（筆者撮影）

を対象としたヒアリング調査、及び教育機関の校史などをもとに情報収集し、戦後における被服支廠の転用実態とともに周辺地域との関連について明らかにすることを目的とする。

2. 軍都広島と戦前の被服支廠

明治以降広島は軍都として発展し、明治27(1894)年の日清戦争開戦後は大陸への輸送基地として重視され、宇品港までの軍事専用線(宇品線)敷設などインフラが次々に整備されたほか、東京から広島城内に大本営が移

されるなど軍都としての性格を強めていく。日清戦争終戦後の明治29（1896）年には宇品地区に陸軍運輸部が置かれ、宇品線沿線には「陸軍の三廠」と呼ばれた軍需工場（兵器支廠・被服支廠・糧秣支廠）が相次いで建設された。うち被服支廠は当初、日露戦争中の明治38（1905）年に広島県皆実村に戦争被服品の洗濯修理工場として建設され、被服支廠の派出所を経て明治40（1907）年に広島陸軍被服支廠に昇格し、終戦まで存続する。

被服支廠の4棟の倉庫は昭和20（1945）年の原爆投下により爆心地側の鉄扉が歪むなどの被害を受けたが建物は倒壊せずに残り、被爆直後は臨時の救護所として使用された。その後は後述のように用途を変えながらも存続し、現在に至っている。

なお、平成6（1994）年には広島市によって被爆建物に登録されるが、令和元（2019）年、県は倒壊の危険性や補修コストを理由に2棟を取り壊す方針を示した。しかし保存を訴える署名が2万筆以上集まった結果保存の方針に転換し、活用の方向性の検討へと至っている。

3. 戦後における転用の変遷

原爆投下により焼け野原となった広島において、焼け残った被服支廠倉庫は貴重な建築物であり、被爆直後から様々な形で転用されてきた(表1)。以下では、被服支廠の転用時期を終戦～1960年代と1960年代～1990年代の2期に分類し、その変遷についてまとめた。

(1) 終戦～1960年代

この時期には主に教育施設（学舎及び寮）に転用されていることがわかる。

a) 広島県立広島第一高等女学校

1号棟は、昭和21（1946）年から広島県立広島第一高等女学校（現広島皆実高等学校）の学舎として使用された。同年4月からは倉庫の一部を修理した上で「授業場」として全生徒を収容し、翌年には学校全体が被服支廠の敷地に移転している。

教室としての設備は殆ど整っていなかったため、当地の西約27kmにあった大竹市の旧海軍潜水学校から机と

椅子の払い下げを受け、市西部の草津地区まで海上輸送しその先10kmは生徒四人一組で人力にて運ばれていたという⁴⁾。同文献には当時の卒業生の証言も記録されており、倉庫内部には通風・採光・音響などさまざまな問題があったことが記述されている。このような悪条件の下でも、終戦直後の苦境にありながら被服支廠の「教室」で学べること自体に大きな喜びが感じられていたとの記述も確認できた。

b) 広島大学教育学部

昭和21（1946）年から2・4号棟は広島高等師範学校（現広島大学教育学部）の出汐町校舎として使用された⁵⁻⁷⁾。のち昭和28（1953）年に同校は移転するが、後述のように4号棟の1/3部分は寮として使用が続けられた。

c) 広島県立広島工業高校

広島大学が移転した直後の昭和28（1953）年、広島県立広島工業高校が被服支廠直近の敷地に移転し、1～3号棟は同校の製図室として使用された。同校は昭和31（1956）年に1・3号棟を県に返納するが、2号棟はその後少なくとも昭和32（1957）年までそのまま使用され続けたことがわかる⁸⁾。倉庫の大空間を木板で区切り、各教室として使用されていたことが確認できた。

(2) 1960年代～1990年代

この時期はこれまでの学舎に代わり民間企業の倉庫や学生寮として利用されていたことがわかる。

a) 日本通運株式会社

昭和30（1955）年から同社出汐倉庫として1～3号棟と4号棟の東側2/3が使用され、平成7（1995）年まで貸付されていた。

b) 広島大学 学生寮

昭和40（1965）年に広島大学の男子寮「薫風寮」が設置され、平成7（1995）年3月末まで存続していた。4号棟の西側1/3部分が転用されていた。

この詳細についてはこれまで明らかにされてこなかったが、本研究において詳細調査を実施しその実態を把握することができた。次章にて詳述したい。

表-1 戦後における被服支廠4棟の転用の変遷

年	1号棟	2号棟	3号棟	4号棟
1945(S20)	被爆直後 臨時の救護所			
1946(S21)	広島第一高等女学校 校舎	広島高等師範学校 校舎 (1949年～広島大学教育学部)	広島県繊維製品品質統制株式会社 倉庫 (1948年～広島県繊維製品商業協同組合)	広島高等師範学校 校舎 (1949年～広島大学教育学部)
	広島市繊維製品統制株式会社 倉庫			
1947(S22)	広島第一高等女学校 校舎移転			
1953(S28)		広島大学教育学部 校舎移転 広島県立広島工業高校 教室		広島大学教育学部 校舎移転 広島大学 寮 設置
1955(S30)				
1956(S31)	広島県立広島工業高校 返納		日本通運 倉庫	
1967(S32)		広島県立広島工業高校 製図室		
1965(S40)	日本通運 倉庫			
1995(H7)	日本通運 貸付終了			広島大学寮「薫風寮」設置
	空き家	広島国体局	空き家	広島大学寮「薫風寮」閉鎖

4. 「薫風寮」としての被服支廠

(1) 薫風寮の概要

薫風寮は旧制広島高校に由来する男子寮である。広島大学発足後は、後継部局である同大教養部の寮として使用された。教養部は昭和49(1974)年に廃止されるが、薫風寮はその後平成7(1995)年まで同大の学生寮として使用された。

(2) 元寮生へのヒアリング

元寮生であるS氏(1972～73年入寮)、U氏(1973～74年入寮)、E氏(1987～88年入寮)、A氏(1990～93年入寮)の4名を対象にヒアリング調査を実施した。

a) 1970年代の薫風寮

1970年代は各寮室に5名の学生が居住しており、70年代初頭には寮食が提供されていた。また、隣接する日本通運の倉庫でアルバイトをしていた寮生もいたことがわかった。加えて、教養部修了後に自主的に退寮する不文律が定められていたことがわかった。



図-2 1990年代の薫風寮 左)寮祭時 右)寮室
写真提供：A氏

b) 1990年代の薫風寮

1990年代は各寮室に2～3名の学生が居住していたことがわかった。家賃と光熱費はそれぞれ月額410円、1800円と格安で、各寮室にはこたつやテレビ、ゲーム機や冷蔵庫、暖房などが設置された(図2右)。

一方、定期的に「寮祭」が開催され、中でもスポーツ大会においては被服支廠内の大空間を活用し、寮内でかくれんぼやバドミントンなどを実施していたことがわかった(図3左)。閉寮直前の1990年代には寮生も減少していたため、空いた寮室は自習室やゲーム部屋など他の目的にも使用されていたことがわかった。

5. 現在の被服支廠内部

許可を得て令和4(2022)年9月に3・4号棟の内部調査を実施した。

(1) 3号棟(旧日本通運社倉庫)

日本通運社出汐倉庫として使用された3号棟は県に返却される際に現状復帰工事が行なわれている。左右確認の表示や昇降機を取り付けた際に穿孔された穴など、同社による倉庫利用の痕跡が各所に遺存していることを確認した(図3)。



図-3 3号棟における倉庫利用の痕跡(筆者撮影)
左)左右確認の表示 右)昇降機の痕跡



図-4 4号棟に遺存する薫風寮の痕跡(筆者撮影)

(2) 4号棟(旧薫風寮)

床や天井は仕切り壁で区切られ、その一部は収納も兼ねていたことがわかった(図4左)。木材の一部は劣化も進んでいるが保存状態は比較的良好であり、天井には落書きやアイドルのポスター、アルバイトの募集案内などが閉寮当時のままの状態で見られていることが確認できた(図4右)。

6. 被服支廠と周辺地域との関わり

次に、被服支廠周辺の商店街、ならびに関係者へのヒアリング調査を実施し、同地域には戦前から被服支廠への通勤者を顧客とした繁華な商店街が存在したことを確認した。さらに1980年代以降の変遷についても明らかにした。

(1) 被服支廠通り(皆実町商店街)

戦前、広島電鉄宇品線・皆実線の電車通りから被服支廠へと通じる街路には、多くの被服支廠通勤者で賑わう繁華な商店街が形成されていたことがわかった。戦後も広く「被服支廠通り」の呼称で親しまれ続け⁹⁾、広島大学の学生をはじめとする学生街として賑わいをみせていたことが明らかとなった。その後広島大学のキャンパス移転に伴い商店街も徐々に衰退していったことがわかった。

当地でかつて商店を営んでいたO氏(昭和7(1932)年生)によると、学生街として賑わいをみせた頃、商店街には数多くの店舗が立ち並んでいたことがわかった。

(2) アイビータウン(旭商店街)

被服支廠の東側に位置する旭商店街は、昭和57(1982)年、被服支廠に絡まる蔦にあやかり「アイビータウン」の愛称が施されたことがわかった。被服支廠の名称を直接冠した皆実町商店街同様、当時は被服支廠の文脈がこ

の商店街にまで及んでいたことがわかる。現在は高齢化により商店街組合は解散されているものの、銀行や文具店、飲食店や肉屋等が存続しそのまま立地していることを確認した^{補注①}。

(3) 地域住民との関わり

平成7（1995）年頃まで、被服支廠の敷地は関係者以外の一般市民も出入りが可能であった（現在は立入禁止）。それ以前は犬の散歩場コースや子供たちの遊び場として親しまれていたほか、昭和40～50年代にはラジオ体操なども行われていたことが地域住民へのヒアリングによって明らかになった。

7. 結語

本研究では、戦後の被服支廠における転用の変遷とともに、周辺地域との関わりについて以下の史実を明らかにした。

- (1) 倉庫を目的に建造された被服支廠だったが、戦後も教育機関の学舎や寮に転用されてきた。その際、倉庫内部の大空間を木材で仕切るなどの工夫が施された。
- (2) 広島大学薫風寮の転用時、内部には多様な改造がなされ、自由に居心地の良い空間が寮生自身によって追求されていた。また寮生の多くが被服支廠に対し愛着を抱いていたことがわかった。
- (3) 被服支廠は戦前から多くの人が通勤する工場であり、駅に通じる通りが「被服廠通り」と称されるなど、地域の象徴的存在であった。さらに当初の機能喪失後の1982年以降も関連事象が別個の商店街の愛称に施されるなど、戦前から戦後にかけて被服支廠の文脈は周辺地域に浸透し続けていたことがわかった。
- (4) 1995年頃までは周辺住民が敷地内に自由に出入りでき、日常生活に密着した空間となっていたことが明らかとなった。

【謝辞】

本研究の遂行にあたり、広島県庁の水本全彦様、薫風寮元寮生の皆様、NPO法人PRESENTs HIROSHIMAの積山ミサ様、広島市郷土資料館の前野やよい様、アート開発公社の宮本様、被服廠通り・アイビータウン商店の皆様より多大なるご協力を頂きました。ここに感謝の意を表します。

補注

(1) アイビータウンでは2023年4月現在、被服支廠の活用とともに周辺地域も一体的に活性化すべく、アートを絡めた企画が進められていることを関係者へのヒアリングで確認した。

参考文献

- 1) 倉田梨紗・水田丞(2022) 被服支廠における施設配置の変遷に関する研究, 日本建築学会中国支部研究報告集45巻
- 2) 広島市郷土資料館(2014) 広島市郷土資料館企画展「陸軍の三廠～宇品線沿線の軍事施設～」展示開設パンフレット
- 3) 橋本秀夫(2009)「橋本秀夫の仕事ぶり」橋本秀夫遺稿集編集委員会
- 4) 皆実有朋会(2019)「皆実有朋アーカイブス報告vol.7」
- 5) 広島大学(2003)「広島大学五十年 資料編上巻」
- 6) 広島大学(2003)「広島大学五十年史資料編下巻」
- 7) 広島大学(1977)「広島大学二十五年史 包括校史」
- 8) 広島県立広島工業高等学校創立100周年記念事業実行委員会(1997)「写真で綴る百年史」
- 9) 広島市(1971)「広島原爆戦災誌」
- 10) 元寮生及び地域住民へのヒアリング(2022年9月～12月実施)

(Received April 10, 2023)

STUDY ON THE TRANSITION OF CONVERSION OF THE HIROSHIMA ARMY CLOTHING DEPOT AFTER THE WAR AND RELATIONS WITH SURROUNDING AREA

Megumi SAKAI, Masaaki OKADA

Former Hiroshima Army Clothing Depot was one of the important military facilities for former military city Hiroshima. The existing four warehouses are the oldest reinforced concrete buildings in Japan, three of which are owned by the prefecture and will be used in the future as the largest bombed buildings. The history of the atomic bombing of this building has been noted since the war, and the actual situation at that time has been clarified 1) 2). On the other hand, after the end of the post-war period, it was diverted to universities and private companies, and its history as a reconstruction heritage that contributed to the reconstruction of Hiroshima has not received much attention, and the detailed usage situation at that time has not been clarified. Therefore, the purpose of this study is to collect information based on literature surveys and interviews with former dormitory students and local residents, and to clarify the actual situation of diversion after the war.